

Title	ハンス・ホルバインの妻の像
Sub Title	Das Bildnis der Gattin Hans Holbeins d. J.
Author	海津, 忠雄(Kaizu, Tadao)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1968
Jtitle	哲學 No.53 (1968. 9) ,p.129- 146
JaLC DOI	
Abstract	Elsbeth Binzenstock (?), die Gattin des Hans Holbein d. J., war die Witwe eines Lohgerbers und verheiratete sich wieder vermutlich im Jahre 1520, als sie etwa 26 Jahre alt war, mit dem vier Jahre jüngeren Maler, der 1519 in Basel die Meisterschaft erworben hatte. Seit Herbst 1526 befand sich Holbein auf einer Reise in die Niederlande und nach England und war August 1528 in Basel zurück. Bald nach seiner Rückkehr aus England malte er das Bildnis seiner Frau mit den beiden Kindern, die lange ohne Vater gelebt hatten. Immer wieder wurde darauf hingewiesen, dass das Motiv des Familienbildes von einem italienischen Marienbild angeregt wurde, das Holbein irgendwo in Oberitalien, in den Niederlanden oder in Frankreich gesehen haben soll. Die Mutter sitzt leicht nach rechts gerichtet und hält die kleine Tochter Katharina (geb. 1526) auf dem Schoß. Der Sohn Philipp (geb. 1521), der nur von den Schultern an sichtbar ist und auf dessen rechte Schulter die Mutter ihre rechte Hand legt, ist in der strengen Profilansicht gesehen ; sein Blick ist nach rechts oben gerichtet. Die Mutter war damals wohl erst 34 Jahre alt, aber durch Kummer und Sorgen früh gealtert. Der Künstler sah nicht ohne Mitgefühl diese untrostliche Frau und Mutter. Im Sommer 1532 ging er nach London zurück, wohin er infolge der Flucht der Mäzene vor Reformationswirren in Basel und des dadurch verursachten Ruchgangs der künstlerischen Aufträge übersiedelte. Seit 1536 diente Holbein am Hof Heinrichs VIII. und schuf im Auftrag des Königs die Bildnisse der Königinnen. Diese repräsentativen Bildnisse lassen uns unter der harten Erfassung der äußeren Züge und der Persönlichkeiten der Modelle die warme Empfindung fühlen, die Holbein an dem Bildnis der eigenen Gattin aus dem Jahre 1528/29 erlebt hatte.
Notes	守屋謙二先生古稀記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000053-0135

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ハンス・ホルバインの妻の像

Das Bildnis der Gattin Hans Holbeins d. J.

海 津 忠 雄

Tadao Kaizu

Resümee

Elsbeth Binzenstock (?), die Gattin des Hans Holbein d. J., war die Witwe eines Lohgerbers und verheiratete sich wieder vermutlich im Jahre 1520, als sie etwa 26 Jahre alt war, mit dem vier Jahre jüngeren Maler, der 1519 in Basel die Meisterschaft erworben hatte. Seit Herbst 1526 befand sich Holbein auf einer Reise in die Niederlande und nach England und war August 1528 in Basel zurück. Bald nach seiner Rückkehr aus England malte er das Bildnis seiner Frau mit den beiden Kindern, die lange ohne Vater gelebt hatten. Immer wieder wurde darauf hingewiesen, dass das Motiv des Familienbildes von einem italienischen Marienbild angeregt wurde, das Holbein irgendwo in Oberitalien, in den Niederlanden oder in Frankreich gesehen haben soll. Die Mutter sitzt leicht nach rechts gerichtet und hält die kleine Tochter Katharina (geb. 1526) auf dem Schoß. Der Sohn Philipp (geb. 1521), der nur von den Schultern an sichtbar ist und auf dessen rechte Schulter die Mutter ihre rechte Hand legt, ist in der strengen Profilansicht gesehen; sein Blick ist nach rechts oben gerichtet. Die Mutter war damals wohl erst 34 Jahre alt, aber durch Kummer und Sorgen früh gealtert. Der Künstler sah nicht ohne Mitgefühl diese untröstliche Frau und Mutter. Im Sommer 1532 ging er nach London zurück, wohin er infolge der Flucht der Mäzene vor Reformationswirren in Basel und des dadurch verursachten Rückgangs der künstlerischen Aufträge übersiedelte.

Seit 1536 diente Holbein am Hof Heinrichs VIII. und schuf im Auftrag des Königs die Bildnisse der Königinnen. Diese repräsentativen Bildnisse lassen uns unter der harten Erfassung der äusseren Züge und der Persönlichkeiten der Modelle die warme Empfindung fühlen, die Holbein an dem Bildnis der eigenen Gattin aus dem Jahre 1528/29 erlebt hatte.

スイス北西部の古都ゾロトゥルンの美術館には、若きハンス・ホルバインが1522年にバーゼル市の書記ヨハン・ゲルスターの依頼をうけて製作した祭壇画が収蔵されている。絨毯のかかった壇上で聖母が御子を抱いて御座につき、一段下って右に騎士の姿をした聖ウルズス、左にミラ主教の聖ニコラウスの両聖人が脇侍し、背景には中央の円拱を通して青空が見えるという図である(図1)。ゾロトゥルンの聖母図は図像学的には、たとえば



図1. ゾロトゥルンの聖母 1522年
ゾロトゥルン

れたピエトロ・ロレンツェッティのアッシジなる聖母図(聖フランチェスコ寺の下の教会)などのようにイタリア美術で発展した「聖なる会話 Sacra Conversazione」の流れをくむものである。1522年といえはホルバインはようやく二十才代のなかばに達した青年芸術家であり、その2年ほど前にバーゼルでエルスベトと結婚し、1521年に長子フィリップを儲けたばかりであった。私事になるが早春の一日ユラ山脈を背にしたゾロトゥルンに遊んだ折に、ホルバイン

の青年期の作というにふさわしい南欧的な潑刺たる芸術に接しえて随喜したことを思い出す。聖母は僅かに右下方にうつむき、顔には天上の母の莊嚴はもとよりなく、むしろ心なごむ親しみがあり、どことなく控え目で、われわれの眼は無意識のうちに膝のうえの御子にひかされている。この聖母図はなおまったく初期の作品にかぞえられるが、4年後の〈ダルムシュタットの聖母〉とともにホルバインの聖母美術の格調と特色を物語る傑作である。

眼をバーゼルに転ずると、ここの美術館にはホルバインが自分の妻と二人の子供の肖像を描いた家族図がある。ホルバイン夫人は坐像で膝に娘カタリーナ（1526年生まれ）を載せながら顔を僅かに右に向けて眼を細め、「未完成かと思われる」（H. A. シュミート）ほど生気のない右手を自分の前に立たせた少年フィリップの右肩に置き、傷心の女が寸刻ふと虚空にさまようかのように精神的に弛緩して見える。それとは全く対照的に、母の膝に寄りそうフィリップは厳格な側面観で表現され、少年の好奇心をもって何を凝視するのか、大きな眼を右上方の一角に向けて開く。この対比には人間的に成長した約30才のホルバインの綿密な思慮があったことと思われる（図2）。

母は真中から髪を分けて後で結び、その上に薄絹を被り、胸の大きく開いた濃紺の衣を着て、右肩から毛皮をかけている。フィリップは青衣の上に青チョッキをつけ、白いよれよれの襟をのぞかせている。カタリーナは娘らしく髪を編んでもらって、白い半袖のブラウスの上に茶色のジャンパーを着ている。つまり何も更まったところのない、ごく有りふれた家族の群像である。この家族図は紙にテンペラをもって描かれた。しかし後世誰かの手で群像の輪郭線にそって切り抜かれ、菩提樹の板上に貼られた。したがって現在の暗い背景は——ピンダーがいうように——本来のものに近いとは思うけれども、考察の対象ではない。図の右下隅に製作年代が書かれているが、その切断のさいに最後の数字が——カタリーナの左手の指



図 2. ホルバイン家族図 1528/29年
バーゼル

先と共に——消えてしまった。子供たちの年齢から判断して、これは1528もしくは1529と書かれていたはずである。

〈ホルバイン家族図〉について或るバーゼル婦人がこう批評している。「ホルバイン夫人は本当に悲しそうな顔付をしています。ホルバインはきっと心のつめたい人だったのです。」実際ホルバイン夫人の肖像は憂愁の翳のある顔面の表情

が一つの魅力となっている。エルスベト・ビンツェンシュトック(?)すなわちホルバイン夫人はバーゼルの皮革職ウルリヒ・シュミート（字シュリッフシュタイン）の寡婦であった。ホルバイン研究家 H.A.シュミートの推測によれば、彼女は1512年（この年に彼女の名前が記録に出てくる）に大凡18才で最初の結婚をし、1528年には34才位になるはずだが、これを念頭において肖像を見ると、彼女は年齢不相応に老けていたようである。その表情には息子フランツを成させた先夫を死に奪われた女の不幸な運命が翳さしているのであろうか。それともあのバーゼル婦人が女性特有の鋭い直観力をもって云ったように、ホルバイン夫人はホルバインとの第2の結婚生活のなかでも懊悩の日々を送っていたのでであろうか（図3）。

ルーヴル美術館にゾロトゥルンの聖母頭部の習作がある（図4）。ヴォルトマン、ガンツ、シュミートらホルバイン研究家たちはこぞってこの素描のモデルとしてホルバインの妻を考えている。当然聖母図の御子のモデ

ルは前年エルスベトとの間に生まれたフィリップでなければならぬ。ルーヴルの素描はまず第一に微笑を含んだ顔の気取りのない自然さによって印象的であり、あえて格別の配慮を要しないホルバインの身近かな婦人をモデルにしていることは自明である。しかしその婦人は実は彼の妻であったと説明されても、人は直ちに納得しがたいことであろう、眼や頬骨や顔の輪郭によく似た点があるにもかかわらず、ゾロトゥルンの聖母の



図 3. ホルバインの妻の頭部
家族図部分

モデルはたしかに未だ若い。それから〈ホルバイン家族図〉が作られるまでの間は6,7年しかない。それにしても妻は老けすぎている！1522年に聖母図のモデルに立った若い女が、1528/29年に再度モデルに立つときに時の流れをこれほど明白に顔に刻印するためには、彼女はどんな経験を味わうべきであったろうか。われわれはそれについては何も知らない。ただ、われわれが知っていることは1526年秋から1528年夏までホルバインは家族のもとに居なかったということだけである。

ハンス・ホルバインはアウクスブルクの画家ハンス・ホルバインの次男として1497年末か1498年初めに生まれ、17才になった1515年夏遍歴の職人としてバーゼルに来た。翌1516年彼はやや遅れてバーゼルに現われた兄アンブロジウスとともに画匠ハンス・ヘルプスター（またはヘルプスト）の門を叩いた。少年ハンス・ホルバインがその当時すでに練達した芸術的手

腕の持主であったことは、1515年暮から翌16年正月にかけてエラスムス著「愚神礼讃」の一卷の欄外に実に軽妙洒脱なペン描き挿絵を描いたことから知られる。その後一時ルツェルンではたらき、この機会にたぶん上部イタリアに足を踏み入れたと考えられている。1519年バーゼルに帰り、同年9月25日に画家組合ツーム・ヒンメルに加入、翌1520年7月3日バーゼルの市民権を獲得、ホルバインはここに名実ともにバーゼルの若きマイスターとなった。エルスベトとの結婚もまたこの時分である。まもなく彼の手によって次々と感動的な作品が現われた。1521年死せるキリストの図（バーゼル）、1522年あのゾロトゥルンの聖母図、1523年執筆中のエラスムス（パリとバーゼル）など一群のエラスムス像、1526年ダルムシュタットの聖母図、そして木版画〈死の舞踏〉の連作（1524 / 26）など。

しかし1526年秋、エラスムスがアントワープとロンドンの知友あてに認めた推薦状を頼りにホルバインは流離の身となった。この年に第二子カタ



図 4. ゾロトゥルンの聖母頭部習作
パリ、ルーヴル

リーナが誕生し、妻エルスベトは幼いフィリップと乳のみ児を抱えながら夫の安否を気づかって独り心を焦した。この旅行の目的の第一はアントワープのペトルス・エギディウスあてのエラスムスの書状から察せられるように、アントワープで巨匠クエンティン・マッシスの警欬に接することであった。しかしエラスムスはロンドンのトマス・モアにあてては「ここ（つまりバーゼル）では諸技芸が凍えています」と書き、バーゼルの芸術

生活はホルバインにとってままならぬものであったことを匂わせている。ともかくホルバインはロンドン滞在中にトマス・モアとその家族、カンタベリ大司教ウィリアム・ウォーハム、天文学者ニコラウス・クラッチアなど名士の肖像を作り、相当の収入をえて、2年後の1528年夏バーゼルの家族のもとに帰還した。その年の8月に彼はライン河畔の街ヨハンスフォアシュタットに新居を購入した。こうして再びバーゼルでの生活がはじまった。

ホルバインの伝記が語るのは以上のことだけである。そこにはわれわれの興味をそそるようなホルバインの人格についての一片の記述もない。ホルバインがその家族と人間的にどんな関係をもっていたか、それはわれわれの臆測にまかされている。一体ホルバインは自分自身について何も語ったことがなく、彼ほどの肖像画の名手でありながら、自画像もほとんどのこさない。その点にデューラーとホルバインの違いがある。

われわれが知るかぎり、デューラーの芸術的創作の最初のもものは1484年すなわちデューラーが13才のときの自画像（ヴィーン、アルベルティナにある素描）である。これに続いて幾つかの素描や絵画の自画像があり、それらがいわば自叙伝的意味をもっている。ところがホルバインの自画像と伝えるものはフィレンツェなる一点の素描（ウフィツィ）と、魅力的とは云い難い多数のミニアチュールの絵画があるにすぎない。いずれも最晩年のホルバインを写している。その素描は後世の手になる、しかし信頼すべき添書をもち、それによれば1543年秋ロンドンでわずか45才をもってペストに倒れたホルバインの死の直前の製作である。IOANNES HOLPENIVS BASILEENSIS SVI IPSIVS EFFIGIATOR AE. XLV.

芸術家が自分の鏡映像に対峙してこれを写すことがどういうものであるか、ホルバインは生まれながらに知っていた。幼年時代に彼は父ハンス・ホルバインがアウクスブルクの工房で〈聖パオロ寺板絵〉（1503/04、アウクスブルク）の添景人物として自分と息子兄弟を描くのをその眼で見ている。またデューラーが最初に自画像を素描した年頃の、厳密に言えば14才

の子のハンス・ホルバインを肖像に留めた者はしかし自分自身ではなく、父であった（アンブロジウスとハンスの肖像素描，1511，ベルリン，銅版画室）。それ以後あの45才の自画像にいたるまで30年間，われわれはホルバインという偉大な肖像画家自身の人間をいかにしても見ることが許されない。それは特筆すべきことに違いない。1523 / 26年頃および1538年頃と年代づけられるバーゼルなる2点の素描に人はいかに期待をかけたことか。それらはしばしばホルバインの自画像と称されていたのである。しかしそれも今では他の誰かの肖像であることが判明している。こうしてバーゼル時代のどの時点からもホルバインの自画像は伝えられていない。＜ホルバイン家族図＞において各人物のモチーフが一様に右向きであることに眼を着けて H.A. シュミートは家族図の右にホルバインの自画像があるべきであり，この自画像は何か新しい大きな仕事の注文があったために作られずに終ったと考えている。しかし仮にそうであるとしても，実現されなかった形式について誰が語りえようか。しかも上述したように，とりとめもない物思いに沈む妻と来るべきものの到来を待つて天空の一角をにらむ幼いフィリップの対照をあらわすモチーフはすでにホルバインの深い思慮を表現するものであり，その構図はそれ自体で完結している。極言すれば，家族図の時点でもホルバインの自画像は考えられない。

デューラーは自分の家族の年代記を書き，ネザーランド日記を遺した。しかしホルバインにはこの種の著述は望むべくもない。この二人の偉大な芸術家の場合には自分の自我に対する態度はまったく違ったものであった。この違いはそのまま二人の芸術作品のうえに表われている。バーゼルの美術史家ランドルトはハンス・ホルバイン父子とデューラーの肖像芸術の本質を次の言葉で云い表わしている。「芸術家として父のホルバインの人間に対する関係はデューラーのような弁証法的関係でもなければ，息子ハンスのような批判的・即物的かつ隔絶的關係でもなく，いわば共感的関係である。」この三人のうち父のホルバインが最年長で1465年頃に生まれ，

デューラーは明らかに1471年5月21日に生まれ、子のハンス・ホルバインはデューラーよりまる一世代おくれて1497年末か1498年初めに生をうけた。三人の芸術家の生年の間隔はそのまま彼らの芸術の本質的な懸隔ともなっている。父のホルバインではモデルは描かれるべく自分の前におかれた対象ではなく、自分との親密な共感的関係において存在するものであり、肖像が「自己表現の一つの可能性」である。デューラーではモデルは対決し対話する相手であり、芸術家自身が対象に向かって語りかけた偉大なドイツ的精神がわれわれの感動を呼び起すことであろう。しかし子のハンス・ホルバインはそれをそこに見出し造形に駆りたてられた対象として一定の心的な距離を隔ててモデルを事物的に見、その可視的なもののうちにモデルの全人格を把えようとする。したがって彼の場合にはデューラーの意味でドイツ的精神の表出を語ることは適当ではない。「デューラーは『私はこの特性をこう考えます』と明瞭に口に出して云うが、ホルバインは説明の最後の言葉を観る人に委ねている」——この表現をもってゲオルク・デヒオは二人の芸術家の肖像芸術の本質の一つを特徴づけている。もちろんホルバインには<死の舞踏>のようにドイツ的なファンタジーから生まれた作品があるけれども、少なくとも肖像芸術においては彼の芸術の真価は個人的な思想や感情を差しはさむ余地のない純粋な可視性に徹するところにある。しかしホルバインの場合にも可視的なものの背後に不可視的なものが秘められている。それについてはこの論文の最後に述べることができるであろう。

ホルバインが幾度となく描いたエラスムスの肖像のうち最後のものとなった1531 / 32年の円形のミニアチュール(バーゼル)を考えてみよう。エラスムスは宗教改革のバーゼンをきらって1529年4月以来フライブルク・イン・ブライスガウに退避していた。ホルバインは1532年夏の再度のイギリス旅行を前にしてフライブルクにエラスムスを訪ね、この肖像を作った。ミニアチュールであるから当然頭部のみが表現されている。この頭部は実

ハンス・ホルバインの妻の像

はロングフォード宮にある1523年のエラスムス像の構想に従い、姿勢ならびに採光がまったく同様に考えられている。この1523年の肖像ではエラスムスはルネサンス風の片蓋柱のある一室で机に立ち向って書物の上に両手をおく半身像で、まことに諸学の泰斗たるにふさわしい儀容的 *repräsentativ* な姿勢を与えられている。背後にはカーテンが垂れ、その陰には棚の上に書物と葡萄酒のフラスコが見える。その書物の1冊（フラスコに寄りかかっている）には製作年代と、作るより批評する方が易いという意味のラテン語銘文が書かれている。1527年の〈カンタベリ大司教ウィリアム・ウォーハムの肖像〉においても出合うこの儀容的な姿勢と、背景をなすルネサンス建築によってこの偉大な人格がさらに一層普遍化され崇高にされ拡大される。それと同時に、書物とエラスムスが薬用に愛飲したブルグント産葡萄酒と銘文の警句によってその人物の自我に迫ろうとする意図が明白に読みとられる。しかしホルバインは頭部ひとつをもってエラスムスの全人格を完全に語らしめることもできたのである。1531 / 32年の円形の肖像を見ると、晩年のエラスムス(1535年没)にも才気はなお衰えなかったことが分る。その口は今にも開かれ、あの銘文が語るような機知にとむ寸鉄を吐いて人の心を刺すかのように見える。初期の肖像が姿勢や背景をもって語ったものの一切が顔貌ひとつのうちに集約され、この人格の本質がさらに一層鋭く一層明確に物をいっている。ホルバインはいわば科学者の眼をもって人物の性格と心理をその頭部の可視的なもののなかに発見し、それを彼の芸術形式にまで高めるのである。

父のホルバインからデューラーをへて子のハンス・ホルバインにいたる経過は取りも直さずドイツ美術史の一つの必然的過程であり、この歴史的過程はドイツ美術のイタリア化の過程とも並行している。ここでわれわれはホルバインとイタリア美術の関係に考え至るべきであろう。

この重要な問題について今は単にスケッチ風に述べられるにすぎない。ホルバインの父はみずからイタリアの地を踏んだことがなかったが、独自

の仕方で末期ゴシックからルネサンスへの道を歩んだ。彼のルネサンスは自発的なルネサンスであった。ところが息子ハンス・ホルバインは当時ヴェネツィアとの交易が最高潮に達していたアウクスブルクで生をうけ、すでに先輩としてアウクスブルクの画家ハンス・ブルクマイア（1473-1531）をもっていた。この画家はデューラーの同輩で同じ頃にイタリア、とくにヴェネツィアへ度重なる旅行を試み、デューラーがニュルンベルクではたしたような役割をアウクスブルクで演じた。すなわちブルクマイアはドイツのイタリア化ルネサンスの開拓者の一人となったのである。こういうわけでホルバインは彼の父とは無論のこと、デューラーともおのずから異なるところがあった。比喩的にいえば、ホルバインはデューラーやブルクマイアが編んだルネサンスの揺籃のなかで成長したのである。「彼の眼は当時のドイツの芸術家にとってまさに太陽であったもの（1506年のデューラーの証言による）すなわちイタリアを最初に見たとき、すでに太陽のようであった」（ガントナー）。

ホルバインのイタリア旅行に関する古記録は皆無であり、17世紀はじめに美術家列伝を書いた「北欧のヴァザーリ」ともいふべき画家カレル・ファン・マンデルは「彼はイタリアへ行ったことがない」といっている（Carel van Mander, *Het Schilder Boeck*, Alkmaar 1604）。ところがホルバインはかの地の市長ヘルテンシュタインの家の壁画製作を主なる仕事としてルツェルンに1517年10月から1519年5月まで滞在したという記録をわれわれはもっている。その記録がたまたま沈黙している1517年12月から1519年2月までの或る時期、たぶん1518年末から1519年はじめまでの時期にミラノへの旅行が挿入されるべきであったろう。この旅行によってホルバインはロンバルディアの、とくにレオナルド一派の芸術圏に接近したわけで、その体験はそれ以後の芸術創作を少なからず肥沃した。そのうえ1523年末または1524年はじめのフランス旅行が合せて考えられる。たぶんブルジュ、アンボワズ（クルー城）、アヴィニョンがおもな逗留地であっ

た。そのさいにホルバインはクルー城で1519年に没したレオナルドの最晩年の作品に接する機会をもったことも推測される。H. A. シュミートは〈ホルバイン家族図〉の先型として、ホルバインがネザーランドで見た今はなき何らかのイタリアの原作とともに、フランスで瞥見したレオナルドの晩年作も考慮にのぼることを指摘している。それはともかく、ホルバインはデューラー以後の最大の芸術家としてドイツ人が南欧の形式世界へ突入しうる極限を示していることは明白な事実である。(ホルバインとイタリア美術の関係は一層徹底的に論ずべき問題としてわれわれに提起されている。そのさいにはヴェルフリンが「イタリアとドイツ的形式的感情」において行なったドイツ美術とイタリア美術の本質的考察が一つの出発点をなすであろう。)

1528年夏、ロンドンからバーゼルに帰郷したホルバインが2年ぶりに再会する妻に発見したものは、それが若き日の妻であったといわれる1522年のゾロトゥルンの聖母のモデルではなく、焦慮のために年令よりも早く老けた女であった。長いあいだ苛酷な境涯に耐えねばならなかった女は待ちわびた夫の帰還を素直に喜ぶ心を忘れ、相変らず涙にくれていた。パウル・ガンツはホルバインの妻は早くから眼病を患い、それがすでにゾロトゥルンの聖母頭部の習作(ルーヴル)に始まっているという。ともかく翳のある瞳、赤味のさす臉はわれわれの詩的想像力を無限に掻き立てる。「ながく立ち止まっていると微かな悲劇的表出がだんだん深まって行く」(ピンダー)。ホルバインは真の芸術家であり、こういう妻の容貌に却って心筋にふれるものを感じた。ドイツ市民の妻の像、彼が自分の妻に見出したものはこれであった。勿論この仕事はどこからか依頼される性質のものではありえなかった。すべては芸術家の自由に委されていた。すでに悲劇的表出が妻のなかになければ、彼はこの肖像を作らなかったか、少なくとも別の形式で表現したことであろう。もとよりホルバインはデューラーのように

無限のものへの憧れをもたず、彼の眼に与えられた限界のなかでその内奥にあるものすべてを明快かつ透明に観照し、すべての流れゆくものを静的形式に集約する芸術家であった。すなわちホルバインは事実的に与えられたものを越えることなく、しかも与えられたもののなかに普遍的なものを見出すことができた。こうしてホルバインの妻の肖像は一人の画家の妻の像であると同時に典型的なドイツ市民の妻の像となった。当時の市民の女は経済的な理由から、そして時には組合に承認された若いマイスターが弟子を養う必要から結婚させられ、工房の妻となり、ホルバインの妻のような運命を辿った。当時の芸術家たちはそのうえ実にしばしば旅行をしたが、そのあいだ妻たちは留守を守るのが通例であった。デューラーが1520年7月2日から翌年夏までのネザーランド旅行に妻と女中を伴ったのは異例中の異例で、「凱進行進」と称せられるこの旅行においてのみありえたことである。まだ30才になったばかりのホルバインの地位ではそれは到底望みえないことであった。

その頃ホルバインの妻はふたたび何年間も夫なしに生きねばならない日が来ることを予期していたであろうといわれる。夫は身を立てるために自分を置去りにして未知の国をほっつき歩かねばならない人であることを彼女はすでに覚悟していたのである。この危惧はついに現実となった。1532年7月あるいはそれ以前にホルバインはふたたびエラスムスの斡旋でアントワープをへてロンドンへ赴いた。事実上この時にホルバインのバーゼル時代は終わったのである。その後は1538年に数週間バーゼルに身体を休めたきり再びこの地を踏むことなく、1543年秋ロンドンでペストのために45才の若さで客死した。

傑出したシュヴァーベンの芸術家に特有の離郷性 *Heimatlosigkeit*. シュヴァーベン人の血をうけてエルザスに生まれたマルティン・ジョンガウアやハンス・バルドゥングを度外視しても、古くはペーター・パルラーがある。彼はグミュントに生まれ (1330), 守屋教授が「美しき聖母」の

なかで述べられたようにボヘミアの美術に最高の榮譽を与えながらプラハで死んだ(1399)。ウルム大聖堂建立に従事し、シュトラースブルクの塔の建築家となり、そこで終ったウルリヒ・エンジガー(1359頃-1419)。そしてコンラート・ヴィッツとシュテファン・ロホナー。ヴィッツは1400年頃ロットヴァイルに生まれ、1431年あるいはその少し前にバーゼルに落ちつき1444年にその活動をおえたが、モンブランを望むレマン湖の実景を写し、今日知られる限りヨーロッパ美術最古の風景画家となった。ロホナーは1410/15年ボーデン湖畔メールスブルクに生まれ、1430年頃からケルンに出てその最も重要な画家となって、そこに骨を埋めた。そして最後にハンス・ホルバイン父子。1516年<セバスティアン祭壇>(ミュンヘン)をアウクスブルクにおける最後の仕事として父のホルバインはエルザスのイーゼンハイムへ向って発ち、グリュエネヴァルトがかの祭壇画を完成したあとにアントニウス修道院の画家となった。それに先立って二人の息子アンブロジウスとハンスはバーゼルへ移住していたから、いまや再び画家一門ホルバインの三人が目と鼻の先に住むことになり、しばしば協同の仕事がなされた。上述のルツェルンのヘルテンシュタイン家の壁画は一人前になっていない子のハンスに注文の出るはずがなく、まず第一に父の仕事であり、その協力者として息子が働いたという見方がある。この父にしても結局は離郷者であり、1524年イーゼンハイムもしくは——最近の有力な見解によれば——バーゼルの息子のもとで生涯を終えた。この二人のホルバインに比べれば影のごとき存在にすぎないが、画家一門ホルバインからなお二人の離郷者の名が加わる。父のハンス・ホルバインの弟で、兄なきあとのアウクスブルクに長くは留まらずベルンで一生を終えたジクムント、および1519年バーゼルで夭折したと思われるアンブロジウスが、それである。ともかくヤーコプ・ブルクハルト以来、美術史家は子のハンス・ホルバインのなかに離郷者の特性として「コスモポリタンの堅実さ」を認めてきている。

ホルバインが Wahlheimat 第二の故郷バーゼルと家族を離れて異国に生活しなければならなかった理由は何か。われわれはエラスムスが1526年にトマス・モアにあてて書いた「ここでは諸技芸が凍えています」という言葉を思い出そう。1529年にはこの状況は更に悪化した。その年2月8、9日の両日、宗教改革の激動はバーゼルを騒乱の中に投げ、新教徒は教会堂から剝奪した聖像を犠牲に捧げた。宗教改革は一つの革命であり、社会情勢は一変した。彼の〈死の舞踏〉に見られるようにホルバインは痛烈な社会批判は好むが、元来新旧いずれかの派に属するという政治的ないし宗教的な党派性をもたない。マルティン・ルター、皇帝親衛隊に幽閉さるの報に接したときに示すデューラーの人道主義的な義憤（ネザーランド日記）はホルバインには起りえなかった。しかし、ホルバインがバーゼルに旅の杖をおいた直後の1516年すでに自分と妻の肖像を描かせてくれ、その後も1526年にいわゆる〈ダルムシュタットの聖母〉という家庭礼拝像を注文してくれたバーゼル市長ヤーコプ・マイヤーのような芸術愛護者が政変により失脚してしまう状況のもとでは、ホルバインの芸術生活も生気を失わざるをえなかった。

もちろん改革後に立った新政府もこの不世出の天才に対しては最大限の敬意を表し、彼がもしバーゼルに留まってくれさえしたら年金を与えようと再三提案した。1530年にバーゼル市役所大会議室の壁画をホルバインに依頼したのもこのような市政府の配慮の一部であったと思われる。元来ホルバインはこの大会議室の壁画を1521年6月に着手し、古代の題材による歴史画を描く2面を完成したのみで1522年11月に何らかの理由で中断していた。なお1面が空白であった。ホルバインは1530年6月から9月までにここに旧約聖書による「レアベアム王の慢心とヤラベアムの戴冠」（列王紀上、12：6-11，20）および「サウルに怒るサムエル」（サムエル記上、15：13ff）を描いた。現在その若干の断片と下絵が保存されている。その芸術理念について見れば、これは1530年に完成したと思われる旧約聖書の

木版画挿絵91点——通称「イコーネス」——と密接な関係があり、これらによってホルバインの歴史画の技量は肖像画のそれにもまして優れ、彼の本領はむしろ歴史画にあったのではないかとさえ思われる。しかしバーゼルでの仕事は結局彼をこの地に留めるだけの魅力がなかった。

最後にわれわれの考察は普遍的な局面を越えて再び家族感覚ともいえるべき個人的なものへ帰って行かねばならない。〈ホルバイン家族図〉の形式はイタリアの「聖アンナをともなう聖母図」あるいは「少年ヨハネをともなう聖母図」に由来するということが屢々指摘されている。この場合に人の指がためらいがちに示すものはホルバインがミラノとフランスへの旅行で模写あるいはことによると原作にも接しえたレオナルドの形式世界である。たしかに三人の群像が三角形構図に組合わされた家族図は全体として、聖母を描くイタリアの恩寵図 Gnadenbild の気分を漂わせている。家族図はそれ自身ですでにモニュメンタルな性格をもち、それによって妻と二人の子供が永遠化されている。まさにそれなるが故にこれはホルバインの入魂の作品であった。

あどけない眼で親しみを求める娘カタリーナとすでに人間悟性の目覚めを示す息子フィリップを自分の膝に引き寄せた母は、自分の運命がどうであろうと一切の希望を子供たちの未来につなぐことができる。これはホルバインが妻に贈る慰めであった。さらに彼はフィリップに天空を期待に満ちて見上げる眼を与えた。この気持は彼自身の父ハンス・ホルバインが〈聖パオロ寺板絵〉(1503 / 04) のなかで特別の愛情をもって息子ハンスを表現する気持と同じではなかったろうか。この祭壇画では、パウロの受洗を見物する二人の息子アンブロジウスとハンスの背後に立つ父は指をもってハンスを示し、アンブロジウスは両手で抱えるようにしてハンスを保護し、幼いハンスは左手に杖をもち右手を軽く胸にあてる。三人三様の動作は観者の眼をくりかえしハンスにひきつける。父のホルバインが子のハ

ンスに示した愛情を子のハンスはその息子フィリップに捧げる。父のホルバインは子のハンスに多くの芸術的な贈物を与えたが、それ以上に人間的な暖かい感覚を譲った。その感覚が家族図にホルバインの作品のなかでは稀な暖みのある色彩と繊細な肉付けをもたらしたのである。

ホルバイン夫妻はこの家族図が描かれたあと尚二人の子供ヤーコプとキューンゴルトを得た。

周知のごとくイギリスにおけるホルバインの肖像画家としての活躍はめざましく、1532年から没年（1543年）までの11年間に製作した肖像画の数は今日知られているだけでも50点に近く、イギリスの政変その他の事情で失われたものを考えに入れば100点を下るまいといわれる。ホルバインは1536年以降ヘンリ八世の宮廷画家であり、王の使者としてイギリス国内は云うに及ばず、ヨーロッパ大陸の諸都市を休みなく駆けめぐらねばならなかった。その多忙な活動を叙述しながら伝記作家は忽卒にホルバインが1538年9月から2か月間バーゼルに滞在したことを報告している。このときホルバインは金工を修業させるために長男フィリップをパリへ連れ去った。フィリップはその後リスボン、ロンドンを経て遂に父の生まれ故郷アウクスブルクへ行き、ここで1600年近くまで生きた。長女カタリーナはバーゼルの肉屋に嫁いだ。家族図にはまだ現われていない次男ヤーコプも金工になったが夭折した。ところで彼らの母エルスベトはどうであろうか。彼女は夫よりも6年ながく生きて1549年に没した。

ホルバインはイギリスの宮廷画家として高貴な婦人たちの肖像を多数描いた。あるいは王室を追われ、あるいは非業の最期をとげた、ヘンリ八世の7人の王妃のうちの3人の肖像——先妃二人の女官として仕え、みずから第3王妃におさまり産褥で死んだジェイン・シーモア(1536年作)。第4王妃となってわずか6か月で王室を追われ、王から「フランドルの尼っこ」と罵言された政略結婚の犠牲者アンナ・フォン・クレーフェ(1539年作)。もとは先妃の女官で、第5王妃となり不貞のためロンドン塔で断頭されたカ

ザリン・ハウアド (1540/41 年作)。——また縁談は成立しなかったがヘンリ八世の結婚申込をうけたミラノ公フランチェスコ・マリア・スフォルツァのわずか17才の寡婦クリスティーナ・デンマーク王女の肖像, など。人間模様さながら王室生活を彩り錯綜せしめる貴婦人たちの肖像をホルバインは感情を殺した厳正な態度をもって描いた。これらは王妃の正面観あるいは四分の三観面の端厳な姿勢と、顔貌や個性の冷徹な把握, さらに高価な衣裳と宝石の装身具の繊細な表現をもって先づわれわれを驚歎せしめる。しかもなお, その表現の表面的な冷たさの奥で, 人間性に対する深い理解と感覚の暖かさが洩れ光を放っている。これこそはホルバインが自分の妻の肖像において行なった女性体験に通ずるものである。

参 考 文 献

- 守屋謙二, 聖母美術におけるシエナ派, 美術史. Vol. 1, No. 4, 1951.
守屋謙二, 美しき聖母, 哲学 No. 51. 三田哲学会 1967.
海津忠雄, ハンス・ホルバインの「死の舞踏」, 哲学 No. 49. 三田哲学会 1966.
G. Dehio, Geschichte der deutschen Kunst. Bd. 3. Berlin-Leipzig 1931.
H. A. Schmid, Hans Holbein der Jüngere. Sein Aufstieg zur Meisterschaft und sein englischer Stil. 3 Bde. Basel 1945-1948.
P. Ganz, Hans Holbein. Die Gemälde. Köln 1947.
K. T. Parker, Die Zeichnungen Hans Holbeins in Windsor. London 1947.
W. Pinder, Holbein der Jüngere und das Ende der altdeutschen Kunst. Köln 1951.
J. Gantner, Hans Holbein der Jüngere. In: Schicksale des Menschenbildes. Bern 1957. ヨーゼフ・ガントナー著, 中村二柄訳, 人間像の運命, 京都至成堂書店 1965.
E. Treu, Die Bildnisse des Erasmus von Rotterdam. Basel 1959.
Ausstellungskatalog 《Die Malerfamilie Holbein in Basel》. Basel 1960.
H. Landolt, Das Skizzenbuch Hans Holbeins des Älteren im Kupferstichkabinett Basel. Olten-Lausanne-Freiburg i. Br. 1960.
N. Lieb und A. Stange, Hans Holbein der Ältere. München-Berlin 1960.
F. Dvořák, Hans Holbein d. J.—Zeichnungen. Prag 1965.
B. Bushart, K. F. Reinking und H. Reinhardt, Hans Holbein der Ältere. Augsburg 1966.